

5月3日 復活節第4主日

使 4:8～12 Iヨハ 3:1～2 ヨハ 10:11～18

1. ヨハ

v.11 「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」

もし教会の信者のだれかが、教会の主であり、頭であるキリストのことを考えないなら……、この世の良い指導者や教師のための高貴な教訓を聞いているように考えるなら、その人は聖書を全く理解していないこととなります。この世の多くの指導者たちの中で、イエスは“羊のために命を捨てる”一歩抜きん出た偉大な指導者であって、従って私たちの手本であるという教訓を聖書が教えていると理解する人は、教会のことも福音のことも知らない人です。

教会は、「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったこと」(ロマ5:8)、私たちは「キリストの血によって義とされ」(ロマ5:9)、「御子の死によって神と和解させていただいた」(ロマ5:10)ことを、福音を通して確かに聞いた(コロ1:5)者たちの集まりだからです。キリストは御自分の死によって、私たちに“神との間の平和”(ロマ5:1)を得させてくださいました。そのように理解しない人は、“羊飼いを知らない羊”(v.14)です。

実際、教会の目的はこの世に平和を作り出すことであるという主張が、しばしば聞かれます。マタ5:9がその根拠とされるのですが、そのような主張は“聖書も神の力も知らない”(マコ12:24)人々の共感を得るのに大いに好都合であって、そこでは福音も信仰も抜きにしての連帯が可能になります。

しかし神は、私たちがまだ敵であったときに(ロマ5:10)、キリストの死を通して私たちが御自分と和解させ(IIコリ5:18)、和解の福音を私たちすべての信者にゆだねられたのです(IIコリ5:19)。それは全く神の業であって、人の業ではなく、人間の努力や行いによるのではなくて、神の賜物です(エフェ2:8-9)。この囲いの中の羊でも、ほかの羊でも(v.16)、このキリストの福音を聞き分ける羊こそが、“キリストに属する人”(Iコリ15:23)なのです。

2. Iヨハ

御自身の血によってただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたキリストは(ヘブ9:12)、終わりの日に「生きている者と死んだ者を裁くために来られる」(IIテモ4:1)のと同じキリストです。イエス・キリストはその死と復活によって、今や信じるすべての人に永遠の命を与えてくださいます。私たちキリスト者は、永遠の命を与えられて(Iヨハ5:11)、「今既に神の子ですが」(v.2)、まだ将来の神の国についての私たちの知識には限界があります(Iコリ13:12)。

v.2 「しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。」

ですから、ニケア・コンスタンチノーブル信条によって、私たちは代々の時代の聖徒と共に宣言します。
「罪の赦しをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世の命を待ち望みます。アーメン。」

実に、神の義は「初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17)

3. 使

v.12 「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

“神との間の平和”(ロマ 5:1)は、全く神の業であり、神の賜物であるという点で、新約の福音は旧約聖書と決定的に異なっています。旧約の律法は、年ごとに絶えずいけにえを献げることが命じていましたが、雄牛や雄山羊の血は罪を取り除くことが出来ませんでした(ヘブ 10:1-4)。しかし新約の福音は、「ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされた」(ヘブ 10:10)と宣言しました。

ペトロが足の不自由な男をいやしたように、現代の教会も各種の救済事業や医療、教育などの働きをしています。それら一つ一つの活動は、それぞれ有益であって、少しも非難されるようなものではありません。しかし、わたしたちがそれらの活動について説明したり弁明したりするとき、イエス・キリストの名による救いを、しかもそれを前面に打ち出して、明確に宣言しているでしょうか。

“善い行い”(v.9)については雄弁に語れても、「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」(II コリ 5:18)てくださった …… などという難しいことは、自分には説明できない …… と思っているとしたら、その人には自分が本当に救われているという確信そのものが存在するのか、はなはだ怪しいと言わざるを得ません。

新約聖書を通して伝えられている原始教会の福音は、当時の“無学な普通の人”(使 4:13、I コリ 1:26-31 参照)が信じて受け入れた神のことばでした(I テサ 2:13)。同様に、現代においても「正しい者は信仰によって生きる」(ロマ 1:17)のです。確かに、天上のキリストは今朝、ともにミサをささげる私たち一同に、期待を込めて語っておられます。“わたしの羊は、わたしの声を聞き分ける”、と。

ハレルヤ、アーメン。

5月10日 復活節第5主日

使 9:26～31 Iヨハ 3:18～24 ヨハ 15:1～8

1. ヨハ

v.5 「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

人がキリストとつながるのは、福音を通してであることを、先ず明確にしなければなりません。福音を学ぶことには怠慢なままで、単なる主観的な信仰や、個人的な信心で満足している人は、当てにならない迷信の世界に住んでいることとなります。

私たちはキリストの福音を、教会の間である友から聞かされる以外に、他の途を持っていません。宣べ伝える人(ロマ 10:14)が使徒であれ、預言者であれ、福音宣教者、牧者、教師であれ(エフェ 4:11)、同じキリストの体の一部であって(1コリ 12:27-30)、友であり仲間だからです。そして、その福音の伝承はすべて使徒たちに起源しているということを、強調しなければなりません。

ですから、使徒たちが伝えた福音を聞くことから切り離して、何か別の権威ある人や集団の教えによって、十分にカトリックの信仰は伝えられ得ると思い込んでいる人は、自分が最終的には焼き捨てられる枝(v.6)であることを知らなければなりません。

今日も福音が宣べ伝えられるところには、キリストが共におられて、信じる者たちの間に豊かな実を結ばせてくださいます。それは神の御業であり、キリストの御業です。私たちが福音を学ぶとき、今も私たちに“あらゆる言葉、あらゆる知識において豊かにしてくださる”(1コリ 1:5)のはキリストの恵みです。神は私たちに“知恵と啓示との霊を与え、心の目を開いてくださる”(エフェ 1:17-18)からです。

その場合に、私たちが忘れてはならないのは、キリストの福音の伝承についての規範的権威は使徒たちにあって、もはや現代の福音宣教者も教師も、「信仰の神的遺産に属するような新しい公の啓示を受けない」(教会憲章 25)ということです。

2. 使

使徒パウロはダマスコ途上で復活のイエスを見た後、直ちに洗礼を受けて、キリストの福音を宣教し始めました(1コリ 9:1 参照)。これはおとぎ話ではありませんから、私たちはパウロが直ちに使徒たちから伝えられた福音の伝承を“受け取った”であろうことを考慮しなければなりません。彼は決して、自分独自の新発見の福音を語ったのではありませんでした。

ガラ 1:18 以下の記述と、vv.28-29 との間に、古くから矛盾が指摘されていますが、とにかく使徒パウロはエルサレムの使徒、特にケファ(ペトロ)から福音の伝承を受けようとしたに違いないと思われます。彼は

ダマスコでも(9:20)、アンティオキアでも(11:25)、12使徒のみならず、広義における使徒、すなわち“主を見た証人たち”(1:21-22)の伝承を受け取ったことでしょう。それらの伝承には、要約された初期の信仰告白、イエスの言葉や生涯に関する報告が含まれていたと考えられます。

パウロのガラ1:12の言葉は、この“使徒の伝承”というものの特殊性を明示しています。すなわち「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。」文字通りに読むと理解が困難なように見えますが、彼が受けた福音の伝承の背後には、復活のキリストが立っておられ、伝承が伝えられること自体の中にキリストが働いておられる、という理解がそこにはありました。O.クルマンという新約学者は、「使徒たちすべての共通の証言だけがキリスト教の伝承を形成することが出来、その中に、主御自身が働き給う」と説明しています。

代々の教会は、今日に至るまで使徒継承によってキリストの福音の伝承を受け継いで来ました。しかし、それは使徒たち自身が福音を受けたのとは、決定的な点で異なっています。現代の教会がそれを受け継ぐのは“聖伝と聖書”を通してであって、あくまでも福音についての規範的な権威は使徒にあるからです。

3.1318

この“使徒たちから伝えられたこと”(神の啓示に関する教義憲章8,9)を学ぶことによって、現代の私たちも「神の子イエス・キリストの名を信じ」(v.23)ることが出来るのであり、その同じ福音を聞く人々の間で、その同じ福音を信じて救われた者たちの間で、「互いに愛し合うこと」(同)が可能になります。互いに愛し合うとは、なによりも先ず福音を分かち合うことであり、教え合い、学び合うことに他なりません。

福音を説明したり弁明したりすることは、教導職の仕事であって、信者はただ善良な生活をしていればよいというではありません。「理解力が豊かに与えられ、神の秘められた計画であるキリスト(の福音)を悟る」(コロ2:2)こと、「知恵を尽くして互いに教え、諭し合う」(コロ3:16)ことが、すべての信者に求められているのです。

私たちは希望し、確信しようではありませんか。「主も最後まであなたがたをしっかりと支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、非のうちどころのない者にしてください。」(1コリ1:8)

ハレルヤ、アーメン。

5月17日 復活節第6主日

使 10:25-26,34-48 |ヨハ 4:7~10 |ヨハ 15:9~17

1. ヨハ

v.12 「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」

キリスト教を理解していない人は、「互いに愛し合いなさい」という素晴らしい教えがもっと強調して語られれば、世界は平和になるであろうと考えたりします。しかし、それが幻想に過ぎないことを、現代人は過去100年ほどの歴史の体験から学んだのでした。そのような歴史の教訓に真面目に取り組もうとしない呑気で無知な人々のことを揶揄して、“平和ボケ”などと呼びますが、過去に我が国ではこのボケ病の感染がかなりの高率で蔓延していたことは、周知の事実です。

使徒たちが宣教し、教会が受け継いで来た福音は、その第一の強調点を「わたしがあなたがたを愛したように」(v.12)に置いていることを、キリスト信者は理解しなければなりません。キリスト教は、神が御子キリストを通して顕された愛を、その宣教の中心に置いて来ました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハ 3:16) 「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ロマ 5:8)

ですから、キリスト教信仰にとっての欠くべからざる土台は、「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超える愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされる」(エフェ 3:18-19)ことなのです。この土台を抜きにしては、「わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」(1コリ 15:14)

v.13 「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

私たちがこの聖句を直ちに御子キリストに結びつけて理解しないなら、…これをただの美德や理想的道徳としてしか理解しないなら…、世界はその“虚無”と“滅びへの隷属”から解放されることを決して望み得ないのです(ロマ 8:20-21 参照)。

2. |ヨハ

v.10 「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

キリストの十字架の死が神の愛であったことを、それ故に、私たちすべてのために御自分の御子をさえ惜みず死に渡された神の愛を、聖伝と聖書を通して代々の教会は今日まで聞いて来ました。そして、それは“ただ一度……成し遂げられた”(ヘブ 9:12)だけでなく、その福音は信じる者たちの間で今も“現に働いている”(1テサ 2:13)のです。

「互いに愛し合う」(v.7)とは、この福音を信者の群れが共有することなのであって、「知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、……感謝して心から神をほめたたえ」(コロ3:16)るということを通して、福音は教会の中に常に働き続けるのです。

“神から出る”(v.7)のではない“この世の愛”によっては、人が「成長し、救われるようになる」(1ペト2:2)ことは決してありません。論理を逆転させる人は、神を知らない人です(v.8)。

3. 使

福音を聞いてこれを理解し、信じることは、その福音によって救いに入れられることと併せて、すべて聖霊の御業であり、賜物です。このテキストは、ある教派の人々が主張するように聖霊が先かそれとも洗礼が先かを説明しているのではなくて、そうではなくて、洗礼の秘蹟と聖霊の賜物の切っても切れない結びつきを証言しているのです。

K.バルトという神学者は、“キリスト教信仰とは、人が神の御言葉に対する自分の信頼と、イエス・キリストの福音に対する自分の認識を、教会の信仰宣言という形で、またそれに相応しい生き方によって弁明することである”という主旨のことを言っています。

聖霊は、福音へのそのような“信頼”と“認識”と“弁明”を、洗礼を受けたすべてのキリスト者に賜物として与えてくださいます。「あなたがたは、もっと大きな(霊的な)賜物を受けるように熱心に努めなさい」(1コリ12:31)と、使徒パウロは勧めました。そして説明しました。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(福音)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ10:17) 栄光が神にありますように(ロマ16:27)。

ハレルヤ、アーメン。

5月24日 主の昇天

使 1:1~11 エフェ 4:1~13 マコ 16:15~20

1. マコ

vv.19-20 「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。一方、弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった。」

復活されたイエスは、今や天に上げられて、場所的・時間的制約から解放されて自由に、あらゆる時代の教会と共に働いてくださることを、原始教会の人々は体験したに違いありません。そのような時代の教会で用いられたであろう洗礼志願者のための教材が、2世紀の前半にマルコ福音書の結尾として付加されたのではないかと推測されます。

イエス・キリストへの信仰とは、今も生きて働いておられる“現在の”キリストへの信仰であります。私たちキリスト者は、カトリック教会の教理や教えから、あるいはイエスに関する昔話から、信仰の力を得るものではありません。そうではなくて、御自分の羊たちと共にいて働かれる現在のキリストから力を得るのです。ですから、ローマ・ミサ典礼書の総則は、私たちのミサについて次のように述べています。「こうして、新ミサ典礼書においては、…… 十字架上のいけにえと、ミサにおけるその秘跡的再現は、奉獻のしかたを除けば同一のものであることが教えられているのであり……」(前文2)、「ミサの祭儀は、…… キリスト者の生活全体の中心である。」(1)

そしてこの現在のキリストの働きは、“ただ一度成し遂げられた永遠の贖い”(ヘブ 9:12)と切り離し難く結びついていることに注目しなければなりません。キリストは十字架によって罪と死に対して勝利し(I コリ 15:57、コロ 2:13-15)、私たちを神と和解させて、義と平和を与えてくださいました(II コリ 5:18-21、ロマ 5:1)。

このキリスト者の体験を言い表すための独特の用語が、以前には“キリスト・イエスにあって”(in Christ Jesus)と直訳されていたのを、新共同訳聖書では“キリスト・イエスに結ばれて”(in union with Christ Jesus)としています。「信じて洗礼を受ける者」(v.16)とは、私たちのために死んでくださったキリストの死に結ばれ、それ故にまたキリストの復活にも結ばれる人のことだからです(ロマ 6:3-11、コロ 2:12)。洗礼の秘跡そのものは、決して手品ではないのですから。

2. エフェ

v.10 「この降りて来られた方が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりもさらに高く昇られたのです。」

キリストの教会は、ある意味で最初からカトリック教会として成立したと言うことが出来ますが、いわゆ

る聖職位階制度とローマ教皇の首位権が確立した中世以来、それは神の民の総体としてよりも、むしろ実質的には司教団の総体として理解される傾向がありました。

しかし、第二バチカン公会議はその教会憲章において、次のように明言しました。“地上のすべての国民の中に神の一つの民が存在している”(13)、“キリストのこの教会は信者の正当なすべての地方的集団の中に真実に存在する”(26)。そして聖職位階の任務を説明した後に、“神の民について言われたすべてのことは、信徒、修道者、聖職者に平等に向けられている”(30)と述べています。

昇天されたキリストは今も、歴史の教会の中で継続して「ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされ」(v.11)ることによって、キリストの体を造り上げてゆかせてくださるのです。ですから私たちは、教会を造り上げてゆくのは教導職の仕事であって、自分たちの仕事ではないなどと考えてはなりません。キリストは信者一人一人を「生きた石として用いて」(1ペト 2:5)くださるからです。

3. 使

v.8 「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。」

明らかにこのテキストは、ここで使徒たちのことを述べています。あのめざましい聖霊の働きは、使徒の時代独特の現象でありましたが、私たちはそれ以降教会が聖霊と無縁になってしまったと思ってはなりません。私たちの信じるキリストは、聖霊を通して今も生きて働かれる現在のキリストだからです。

使徒信条は、聖霊を信じるとは、現在のそして歴史における“聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪の赦し”、さらに終わりの日の“からだの復活、永遠のいのち”を信じることだと宣言しているのです。そしてこの現在のキリストの働きは、“ただ一度成し遂げられた永遠の贖い”(ヘブ 9:12)と切り離し難く結びついているのです。

そのようなわけで、私たちは聖伝と聖書を熱心に学んで、神がキリストを通して成し遂げられた救いの御業を、よく知ろうではありませんか。おのおのが分に應じて「わたしの証人となる」(v.8)ことをほかにしては、それに勝る善き業など決してあり得ないからです。主は、またおいでになるのです(v.11)。

「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。……わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのない者としてくださいますように。」(1テサ 5:23)

ハレルヤ、アーメン。

5月31日 聖霊降臨の主日

使 2:1~11 ガラ 5:16~25 ヨハ 15:26-27, 16:12-15

1. 使

v.4,7,11 「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。……人々は驚き怪しんで言った。“……彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。”」

聖霊降臨の主日は、他から切り離された独自の祭日ではなくて、復活節の最後を締めくくる祭りであることに留意しましょう。私たちは想像をたくましくして不思議な出来事を詮索するように、このテキストを読んではなりません。

“一同”(v.4)あるいは“彼ら”(v.11)とは、使徒たちのことであって(v.6)、復活したイエスは“四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された”(1:3)ことを前提として、このテキストは書かれています。聖霊は、今や人々を“罪と死との法則である律法”から解放し(ロマ 8:2-3)、私たちがキリストの福音を理解する“自由”(II コリ 3:17)を与えてくださるのです。

ですから、聖霊降臨の主日は復活節の締めくくりであるとともに、“宣教の働きが、今も信じる民を通して続けられ、豊かな実りをもたらす”(今朝の集会祈願)典礼暦年の“年間”への出発点であることを、私たちは理解しましょう。

2. ヨハ

聖霊は、父と子から出て(ニケア・コンスタンチノーブル信条)、教会共同体という群れに働くと同時に、信者一人一人に(I コリ 12:7)送られる“天よりの力”(ルカ 24:49)です。この聖霊について、通常は教会で教えられることが極めて少なく、そのために信者はしばしば自己流の、あるいは主観的な理解に陥る傾向があります。

聖書がいわば自明なこととして伝えている第一のことは、聖霊と使徒たちの証しとの固い結びつきです。

v.27 「あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しするのである。」

使徒たちから伝えられたこと(神の啓示に関する教義憲章 8)とは無関係に、何か新しい働きをしたり、新しい教えを与えてくれるなどと期待してはなりません。ですから、そもそも聖伝と聖書を自ら学ぶことなしに、聖霊に何かを期待することは間違っているのです。

第二は、“イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた”(ロマ 4:25)という、十字架と復活の出来事との深い結びつきです。

v.14 「その方はわたしに栄光を与える。わたしのものをうけて、あなたがたに告げるからである。」

十字架の福音を自ら学ぶことによって、信者一人一人が神が成し遂げられた贖いに信頼し、キリストによ

る罪の赦しと救いへの信仰を確信し、それ故に神の民である教会共同体と共に歩むということと、聖霊の働きは連動していると言っても過言ではありません。

自分は聖霊の働きの外にいて、誰か他の人に聖霊が働きますようになどと無責任な祈りをする人は、何も分かっていないのだし、現代における聖霊の働きも“新しいぶどう酒に酔っている”(使 2:13)ようにしか見えないことでしょう。

3. ガラ

v.13 「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」

使徒パウロはここで、聖霊が与える自由について論じています。彼はこの手紙で“律法からの自由”(2:19)と、“キリストの福音への信仰による義”(2:16)を、渾身の力を込めて語りました。

“肉”という用語で、低次元の人間生活を考えるのは正しくありません。聖書の用法では、この語は単に人間のこと、罪を犯すことも救いをうけることも出来る被造物のことです。霊の導きによらない自由は、人間に罪を犯させるだけであることを説明して、聖霊の導きの大切さを切々と語りました。

18世紀西欧における啓蒙主義は、人がキリスト教を自分の生きる道として学ぶのではなく、他の様々な思想の一つ、せいぜいそれらの中で幾分か優れた一つの思想として位置づけることを教えました。そしてこの考え方は、現代にまで受け継がれて、中途半端なキリスト教信者を育てて来ました。それが霊の導きを理解せず、聖霊の賜物を知らない大多数の信者のありのままの姿です。

それでも教会は、あらゆる現代の不信仰にあえて抗して、聖霊降臨の主日を今年も祝います。遠い昔の思い出話としてではなく、現代における私たち一人一人への聖霊の訪れを、今なお信じる信仰によって。

v.25 「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。」

これは私たちの願いであり、神への祈りです。主よ、あわれみたまえ。キリストよ、あわれみたまえ。

ハレルヤ、アーメン。